

(2) 高齢者の就業

高齢者の就業状況についてみると、男性の場合、就業者の割合は、55～59歳で90.1%、60～64歳で68.8%、65～69歳で49.5%となっている。また、不就業者であっても、60～64歳の不就業者(31.2%)のうち5割以上の者が、65～69歳の不就業者(50.5%)のうち4割以上の者が、それぞれ就業を希望している。

女性の就業者の割合は、55～59歳で62.2%、

60～64歳で42.3%、65～69歳で28.5%となっている。また、不就業者であっても、55～59歳の不就業者(37.8%)及び60～64歳の不就業者(57.7%)のうち3割以上の者が、65～69歳の不就業者(71.5%)のうち2割以上の者が、それぞれ就業を希望している(図1-2-24)。

高齢不就業者が就業を希望する理由をみると、男性は55歳～59歳で「失業している」の割合が61.7%と高いが、年齢階級が上がるにつれて大

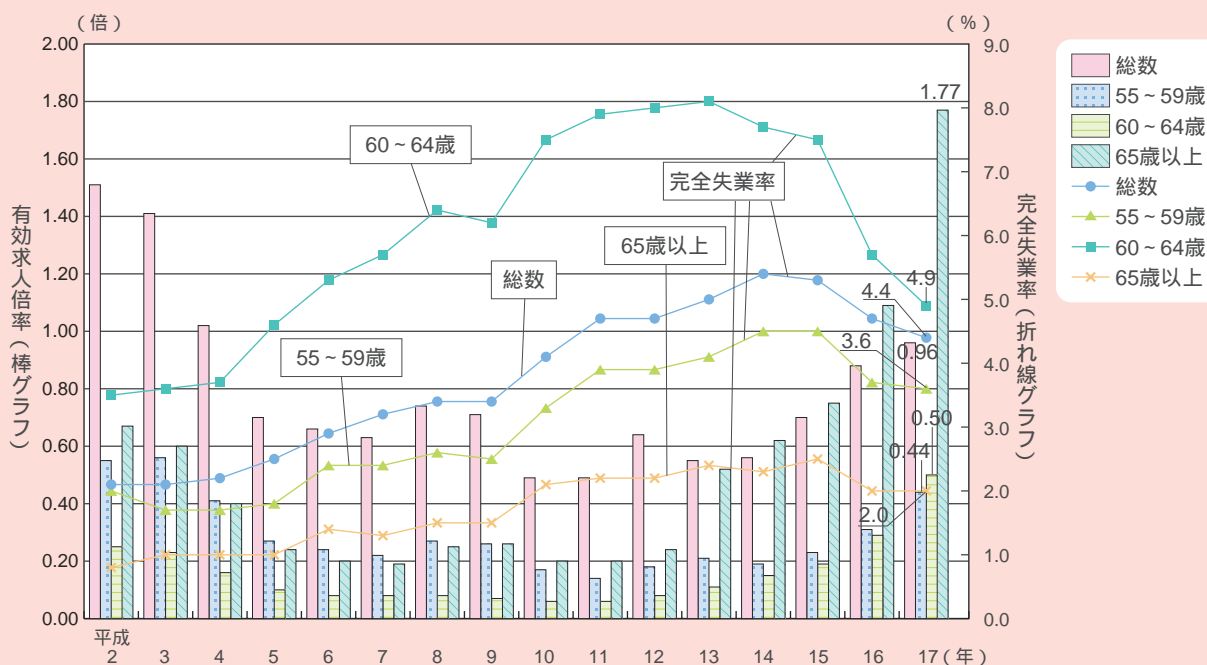
表1-2-25 高齢就業希望者の就業希望理由別割合

		(%)							
		失業している	収入を得る必要が生じた	知識や技能を生かしたい	社会に出たい	時間に余裕ができた	健康を維持したい	学校を卒業した	その他
男	総数	22.7	13.3	12.9	4.5	7.5	26.1	0.0	12.7
	55～59歳	61.7	12.1	6.0	3.7	1.3	5.4	-	9.6
	60～64歳	24.9	14.0	13.1	5.2	9.0	21.6	0.0	12.1
	65歳以上	8.1	13.3	15.1	4.2	8.6	36.1	-	14.2
女	総数	8.9	22.4	7.1	6.6	14.5	23.4	0.0	16.6
	55～59歳	14.9	24.9	7.8	9.0	16.4	12.8	0.0	14.1
	60～64歳	8.8	22.3	6.7	6.4	16.1	24.0	0.0	15.4
	65歳以上	3.4	20.1	6.9	4.6	11.4	32.7	-	20.1

資料：総務省「就業構造基本調査」(平成14年)

(注)就業希望者とは、無業者のうち「何か収入になる仕事をしたいと思っている者」を指す。

図1-2-26 年齢階級別に見た完全失業率、有効求人倍率



資料：総務省「労働力調査」、厚生労働省「職業安定業務統計」

(注)「完全失業率」は年平均、「有効求人倍率」は各年10月の値である。

幅に減少し、「健康を維持したい」、「知識や技能を生かしたい」の割合が増加している。女性は、男性と同様、年齢階級が上がるにつれて「失業している」の割合が減少し、「健康を維持したい」の割合が増加しているほか、「収入を得る必要が生じた」、「時間に余裕ができた」の割合がすべての年齢階級において男性よりも高くなっている（表1 - 2 - 25）。

高齢者の雇用情勢をみると、平成17（2005）年の完全失業率は、55～59歳で3.6%、60～64歳で4.9%、65歳以上で2.0%、また、同年10月の有効求人倍率は、55～59歳で0.44倍、60～64歳で0.50倍、65歳以上で1.77倍と、前年と比べ改善に広がりが見られるものの、年齢層を問わず厳しさの残る雇用情勢（全年齢合わせた完全失業率は4.4%、有効求人倍率は0.96倍）の中でも、高齢者、とりわけ60～64歳の年齢層の雇用情勢は依然として厳しいものとなっている（図1 - 2 - 26）。

【高齢者の就業に係る政策については、第2章第3節1（1）「高齢者の雇用・就業の機会の確保」を参照。】

3 高齢者と健康・福祉

(1) 高齢者の健康

ア 健康状態

高齢者の健康状態についてみると、平成16（2004）年における65歳以上の高齢者（入院者を除く。）の有訴者率（人口1,000人当たりの病気やけが等で自覚症状のある者の数）は493.1と半数近くの者が自覚症状を訴えている。

一方、日常生活に影響のある65歳以上の高齢者（健康上の問題で、日常生活の動作・外出・仕事・家事・学業・運動・スポーツ等に影響のある者。入院者を除く。）の割合は、平成16（2004）年において、65歳以上の高齢者人口1,000

人当たりで246.1と、有訴者の割合と比べると約半分になっている。これを年齢別、男女別にみると、年齢層が高いほど大きく上昇し、またいずれの年齢層においても女性が男性を上回っている（図1 - 2 - 27）。

この日常生活への影響を内容別にみると、65歳以上の高齢者では、日常生活動作（起床、衣服着脱、食事、入浴など）が105.7、外出（時間や作業量などが制限される）が105.2と高くなっており、次いで仕事・家事・学業（時間や作業量などが制限される）が95.6、運動・スポーツ等が64.2となっている。男女別では、男性は日常生活動作、女性は外出が最も高くなっている（図1 - 2 - 28）。

健康についての高齢者の意識をみると、「よい」、「まあよい」、「ふつう」と思っている者の割合（入院者を除く。）は、男女とも、65～74歳では3分の2以上、85歳以上でも2分の1以上を占めている（図1 - 2 - 29）。

これを先にみた高齢者の有訴者率と比較すると、高齢者は、何らかの自覚症状があっても、必ずしも健康状態を悪いと意識しているわけではないことがうかがえる。

イ 健康の維持増進のために心掛けていること

60歳以上の高齢者が、健康について日ごろ心掛けていることについてみると、「休養や睡眠を十分とる」が66.3%と最も高く、次いで「規則正しい生活を送る」60.5%、「栄養のバランスのとれた食事をする」59.1%の順となっている（図1 - 2 - 30）。

また、健康診断等の受診についてみると、65歳以上の高齢者のうち約6割の者が、過去1年間に健康診断や人間ドックを受けたことがあるとしている（図1 - 2 - 31）。